

後北条氏権力と「国」

鈴木 芳 道

はじめに

所謂戦国大名権力の性格を規定する論点のひとつとして、「国」「国家」の問題があげられる。それは、戦国大名権力の支配領域、所謂大名領国をどのように位置づけるか、分権化した日本の戦国期の政治体制をどのように把握しうるのか、という問題でもある。

室町幕府―守護体制の弛緩に伴い、各地には自立的な政治権力が生まれた。それらは守護系、非守護系の別はあれ、また領有規模の大小はあれ、こんにち一般に（とくに国郡制上の一国レベル以上を領有するものについて）戦国大名とよばれている。戦国大名権力は、みずからに相対化した支配権を絶ち、「自分の以三力量」、国の法度を申付、静謐する^①ものとして、領域内での一元的支配権力た然とした。後北条氏は、領域内での調停・裁判権や立法権を掌握し、小領主の所領を「私領」と位置づけ、みずからを「公儀」と称し、さらに神社に対しては「国家安泰」の祈念を要請している。こうしたことから戦国大名権力の支配領域を独自に創出した「国家」とし、その独自性・自己完結性を強調する見解が提出された。^②

また一方、こうした戦国大名権力の支配権力としての一元化を確認しつつも、守護職や將軍偏諱の希求・獲得、さらには有縁寺院の勅願所化や公家との交流といった、従前の權威への接近の事実を重視する視角も提示されている。

後北条氏においては、関東公方足利家を推戴しみずから関東管領と位置づけ、早雲寺は勅願所となり、摂家近衛家とは「内縁」を迎えるなど親密な交流をもった。この視角からは、戦国大名権力の支配の正当性や權威の源泉を天皇や將軍および幕府の職制（守護職）に求め、国家公権を分有するかたちで大名領国Ⅱ国家が成立するという、国家のなかに国家がたち並ぶ複合国家論が提出されている。^③

右にみたこうした戦国大名権力の性格と戦国期の政治体制をめぐる議論は、支配の正当性を国家公権の獲得や中央權威の希求に求め、これに意義を認めるか否かの問題でもある。しかし、意義を認める立場の研究ではこれまで国家公権（守護公権）が実効あるものとする固有の基盤が明らかにされていない、との批判もある。^④

ところで、後北条氏は領域の支配にあたり自身を「公儀」ととらえ、「国家安泰」を実現する主体として臨み、兵卒の動員を「御国」のため、「国法」であるとした。そしてその支配領域を「分国」とよび、起請文には「日本国中」の大小神祇の罰を蒙るべきものとした。後北条氏「分国」は「日本国」のうちにあり、これを「日本国」から離脱したものとみることはできない。これを一般化するならば、戦国期の日本は、「日本国」のうちに主権をもつ諸「分国」がたち並ぶ情況にあったといえる。私は、この体制的情況を確認し、戦国大名権力の中央權威の希求や国家公権の獲得を重くとらえつつも、これを支配の正当性を立証する便法としてではなく、大名権力に内在する属性として理解したい。そこで本稿では、後北条氏権力を素材に「国」に焦点をあて、一、「国家」と「国法」、二、「分国」、三、「日本国」のそれぞれ意味するところを検討し、それを通じて右の問題の理解に資することとしたい。

一、後北条氏権力と「国家」「国法」

後北条氏権力発給文書には、「国家」「国法」という語が散見する。すでに指摘もされているが、「国家」文言については寺社への「国家安泰」の祈念要請がめだち、他の史料においても具体的な政策内容をもつものはない。とはいえ、「東寺は桓武天皇草創、鎮護国家⁶⁾也」と同じように、後北条氏の「国家安泰」の祈願は、為政者の政治宣言という意味では大きな意義をもつものといえる。そうした為政者の立場から出されたものが「国法」である。勝俣鎮夫氏は、「国家」を後北条氏の創出した支配理念とし、「国法」を「国家」の法とした。だが近年の久保健一郎氏の所論では、「国家」「国法」の使用例が限定的であるとして、公儀論としてこれを重くみることに否定的である⁷⁾。私も「国家」の理解など勝俣氏の所論に疑問も禁じえない。しかし、「国家」「国法」の語の使用は決して軽いものではないと考える。そこで本節では、この「国家」「国法」の検討を行ない、それを通じての後北条氏権力を考えてみたい。

(1) 後北条氏権力と「国家」

まず後北条氏権力における「国家」を検討する。大永三年（一五二三）六月二十三日付の箱根神社棟札銘は、後北条氏が「国家安泰」を祈願した初見であるとともに、「国家」の語そのものの初見でもある。銘は「太守」の「大檀那伊勢平氏綱（花押）」の署判があり、「天下昇平、国家安泰、五穀豊熟、万民快樂、別者、大檀越子孫繁衍、兵戈獲利」を希うものとしている。裏返していえば、「太守」である大檀越氏綱の子孫繁栄と戦争の勝利こそが「天下昇平」以下を保障するのである。永禄四年（一五六一）五月、北条氏康は「八州不_レ殘渡_二当方_一ニ來候、徐_二廿年_一存_二国家_一ニ候間、一代之内、無_二横合_一時身退者、聖人之教与存、去年息氏政讓_二渡位_一、隱遁之進退候得共、大敵蜂起、氏政

若輩之間、無了簡、国家之成意見候⁹⁾と述べた。この年の二〇年前の天文十年(一五四一)七月に氏綱は死去している。すなわち「八州」つまり関八州―関東はすべて氏康の支配下となり、氏綱死後の二〇年を安らかにして「国家」を保ってきたとし、氏政への譲「位」後も、若輩の氏政に「国家之成」を助言しているのだと述べたのである。この「位」が「太守」とも「大途」とも称される後北条氏の家督を指しているのはいうまでもない。このように、後北条氏権力はその家督を頂点に「国家」を安んじ保つものとして位置づけられている。これが「兵戈獲利」に拠っているということは、当時の政治情勢を示すものといえなくもないが、むしろ後北条氏権力が軍事政權すなわち武家政權であることを示唆する。

元龜二年(一五七一)七月二十八日付岡本政秀充北条家朱印(虎印判)着到定は、寄親岡本政秀に対して着到すべき寄子とその武具を定め、参陣を命じたものである。これによると、所定の寄子や武具が揃えられない場合や後北条氏家督の「御出馬」に遅れる場合があるならばそれを報告せよとし、報告を怠ったならば「背^レ掟」くものとして彼の寄子を他に付し、その際に「公儀」への弁明は認めないとして、このこと「公儀」に変更はないとする。さらにそのうえで、「抑軍法者、国家安危所也、背^レ法度^二付而者、随^三罪科輕重、無^二用捨^一可^レ被^二申出^一条、兼而無^レ誤樣ニ覺悟專肝候」としている。「国家安危」が「軍法」に掛かっているのだというのである。むろんここにいる「公儀」が後北条氏家督「大途」を指すことはいうまでもない。後北条氏権力が編成した軍隊は、「国家安泰」を担う「公儀」の軍隊なのである。

さて、「公儀」後北条氏権力が「国家安泰」を担う主体であるとの主張が顕然化するののは、外部権力との抗争においてである。甲斐・信濃両国の旧武田氏領における真田昌幸の動向をめぐって徳川家康と対峙するさなかの天正十年(一五八二)十月、氏政は弟の鉢形城主氏邦に対して、「当家滅亡ニ者、争可^レ替」といい、「何分ニも抛^二名利共^一、為^二国家ニ与無^一内外」御走廻尤候、国家無^二相違^一候へへ、旁者其ニ随、何程成共名利可^レ立事、勿論之事ニ候、如何ニ

当意結構からせ候共、国滅亡候へハ、旁者其ニ不_レ随而不_レ叶_一候」といった。北条の家が滅亡すれば争いの場に変わる。名利をなげうって「国家」のために尽力せよ。「国家」が確かなものであれば周囲は従い、「国」が滅ぶならば周囲は離反していく、というのである。そして豊臣政権との緊張が高まるなかの天正十四年（一五八六）十一月、同月二日付で前年に後北条氏に降服した下野国金山の由良国繁に充てた北条家朱印状は「若至_ニ于動_ニ干戈_ニ者、当家之是非此時ニ相極」とし、同日付の豊臣家臣富岡秀高充北条家朱印状は「西表之於_ニ干戈_ニ者、誠当家是非迄候」と述べ、翌三日付の氏邦充の北条家朱印定書には、「国家之是非、此時ニ相極」としているのである。

(2) 後北条氏権力と「国法」

後北条氏権力発給文書における「国法」文言の初出は、いまのところ永禄九年（一五六六）閏八月六日付で伊豆国田方郡西浦重洲の欠落百姓の召返を許可した所謂人返令である。人返令は「国法」文言をもつもののなかでとくにめだつもので、申請者への裁可として事書の後に欠落先を明示した欠落者の名とその総計を記し末尾文言が置かれ、虎朱印を押した奉書形式の北条家朱印状により発動される。

(イ) 右、雖_レ為_ニ権門之地_一、国法之間、急度可_ニ召返_一旨、被_ニ仰出_一者也、仍如_レ件、⁽¹⁶⁾

(ロ) 右、欠落之百姓、縱雖_レ為_ニ不入之地_一、他人之者拘置儀為_ニ曲事_一之間、任_ニ国法_一、領主・代官ニ申断、急度可_ニ召返_一者也、仍如_レ件、⁽¹⁷⁾

史料(イ)(ロ)は、人返令の末尾文言の例である。欠落者の欠落先が「権門之地」や「不入之地」であっても、「国法」であるから欠落先の領主・代官に申し入れたうえで召返せ、というのである。事書のなかには「私領福嶋郡百姓欠落可_ニ召還_一事⁽¹⁸⁾」というものもあり、人返令は、申請者と欠落先の適用対象が、権門領・私領・直轄領を問わず、後北条氏の支配領域全体におよぶものであった。そしてその発効は、武蔵滝山城主で後北条氏の北関東支配を主導した氏政

の弟氏照が、欠落者を出した品河（川）郷町人・百姓中に「人返者御国法ニ候、為_レ先此一札ニ領主へ申断、不_レ移_三時日_二可_レ召返_一候、若違乱之輩有_レ之者、背_三国法子細_二ニ候、大途江申立、可_レ及_三其断_二」⁽¹⁹⁾と指示しているように、まず「此一札」_二北条家朱印状を受けて欠落先の領主へ呈示し、これが無視されたときには「国法」違背として「大途」へ上申し、決裁を仰ぐという方式を採り、「大途」の一元的掌握のもとに置かれた。したがって品川郷町人・百姓中はもちろん氏照の独断による人返は非分となり、ここに後北条氏権力の支配領域は、地域性をもった支城主や権門領・私領の領主といった下級権力と、それらに優越して「国法」を発動する「大途」_二「公儀」という段階的権力構造が浮き彫りにされるのである。

人返令に次いで注目されるのは、検地を基盤とした租税関係である。鎌倉の東慶寺は、足利氏ゆかりの女性が住持した鎌倉尼五山の二位で、後北条氏も手厚い保護をした。この東慶寺領の野葉（庭）郷百姓中に充てた「分国之定法郷中之指引」⁽²⁰⁾は、奉書形式の北条家朱印状である。このとき野庭郷の田畠合せての検地高は一〇六貫三六七文で、うち二貫五〇〇文が神田、三貫五〇〇文が代官給、二貫文が井料免、二貫文が定使給、一一貫文が公事免で、以上二一貫文が「前々神社等之指置ハ免もあれ、御国法如_レ此之間、可_レ為_レ此分_二」として差し引かれる。残り八五貫三六七貫文のうち「前々納所御寺へ参分」が合計二一貫七五〇文であり、六三貫六一七文が「当検地増分」であった。増分はその得分権が東慶寺や野庭郷百姓中にはなく、いったん没収され、「此増分御寺へ新寄進之由被_レ仰断」であった。増分の没収については、天正十五年（一五八七）十一月二日付金子左京亮充北条氏照朱印状「久下郷検地之増」⁽²¹⁾のなかで、「給田之増被_三召上_二儀者、御国法也」としている。野庭郷の増分は、「国法」に従っていったん「被_三召上_二」たうえて東慶寺へ「新寄進」されたものといえよう。ところで「国法」として代官給が規定されている以上、代官の職務規定もまた「国法」とされる。右の「久下郷検地之増」の翌三日付氏照朱印状「代官之掟」⁽²²⁾は、「一、御代官被_三仰付_二上、以_三御検知_二被_三踏立_二候御年貢之辻、催促就_三油断_二、郷未進ニ成来ニ付而者、代官役ニ被_レ為_レ弁御国法也」と

し、以下二か条をあげて代官に対して年貢納入を「国法」として義務づけている。野庭郷の代官もこうした義務を負っていたものとみられる。東慶寺領野庭郷の所領経営は、「国法」の規定するところであった。

一般に戦国大名権力は、ほんらい守護職の職権であった段銭・棟別銭の徴収も行なっていた。このことが、非守護系の戦国大名が守護職を求めた因のひとつとされている。²³ 非守護系の後北条氏は、守護職を称するには至っていないが、やはり段銭・棟別銭の徴収を行なった。その根拠は「国法」である。天正十四年（一五六六）十二月十八日に品川百姓中に充てた氏照朱印状「改而百姓ニ御用捨条々」²⁴には、「増段銭之儀、御託言申上候、御国法定リ候、先年御検知無^レ之郷々へ被^レ懸候、検知有^レ之上者、年貢目之内より可^レ出候、御検知無^レ之内者、百姓地之内より可^レ出^レ之事」とある。棟別銭に関して「国法」文言は確認できないが、「国棟別」²⁵の語があり、これも「国法」のうちと考える。なお右の「御用捨条々」には「御蔵銭借米之事、如^ニ御国法ニ算用次第升才可^レ致事」とあり、またさきの久下郷の給田増分は「御蔵納」とされ、遅延すれば「御法」の如く利足を課するという。「借米」とは未進分を借り受けのかたちで利足つきで認められたものを指すと思われる。納税の遅延に対する利足の負担が「国法」とされているのである。ところで、前項では「国家安危」が「軍法」に掛かるものとされることを指摘したが、これに関係するのであろうか、軍役の義務が「国法」とされている。

い知行方雖^ニ被^レ望候、当領之事者方々へ相分候条、如^レ望不^ニ遣置^一候、先有^ニ不足^一者御堪忍尤候、武井之郷・成塚之郷・萱橋之村、以上三百貫文之所進覽候、国法少^{（異）}儀有間敷候、陣役・普請役無^ニ如在^一可^レ被^レ勤^レ之候、此上猶以被^レ抽^レ他至^ニ于御稼^一者、涯分引立可^レ申候、恐々謹言、

（天正七年）
八月朔日

氏 照（花押）²⁶

史料い充所が欠けているが、知行地配分の際に発給されたものであろう。知行地を配分されたものが陣役・普請役を勤めることを「国法」としているのである。知行地宛行いとそれに対する奉仕義務といった主従制的関係が、こ

ここでは「国法」化しているのである。「京勢⁽²⁷⁾（豊臣政権）」の動向に緊迫する天正十五年（一五八七）極月二十七日付で氏邦の臣猪俣邦憲が出した「榛名峠城法度⁽²⁸⁾」は、同城の勤番規定である。その追而書には「御番普請之儀ハ、諸城大途如^三御法度、当番之日数□分御番普請可^レ有^レ之候、国法如^レ此」とあり、城勤番が「大途御法度」として諸城に一般化され、それが「国法」とされたのである。

このほか「国法」と規定されるものとしては、寺社行事への料銭米納入があげられる。永禄十年（一五六七）十月十二日付の本光寺充北条氏規朱印状「毎年定施餓鬼銭并御霊供米銭書出⁽²⁹⁾」は、本光寺で行なわれる施餓鬼および御霊供養の料銭米に関するもので、費用は本光寺領内から調達するとし、その「直納」を保障したものである。この納方について「年別随^三国法ニ御所務可^レ被^レ成候」としている。また子（天正七年・一五七九）十月晦日付村串和泉充清水康英書状⁽³⁰⁾は、三島社祭礼銭納入拒否問題についてのもので、伊豆国賀茂郡片瀬・稻取両郷が「他国人」の毛利丹後つまり北条高広の知行所となって以後、不入権を主張して祭礼銭の納入を拒み、高広改替後も拒み続けていることに對し、「既十七ヶ条ニ三島御祭銭御法度初文ニ被^レ遊候、乍^レ有^三御国「御国法不^レ存者有^レ之間敷候」としてその納入を命じさせたものである。三島社は後北条氏の帰依篤い神社であり、こうした寺社行事は、後北条氏が担う「国家安泰」を宗教面から支えるものといえよう。

では、「国法」とは史料上「国法」文言に規定されるもののみを指すのであろうか。前述のように「国法」文言もちつとも、「分国之法⁽³¹⁾」や「大途御法度⁽³²⁾」と換言するものがある。さらに子（元龜元年・一五七〇）二月十五日付小代官充北条家朱印状⁽³³⁾は、「御国為^三静謐」に「分國中境目之仕置」の堅固を目的に相模・伊豆・武蔵三か国のうちへ「寺領・社領等迄悉申付」たもののひとつであるが、ここに「国法」文言はなく、「虫窪人足式人申付、中十日小田原城普請可^三走廻^二候、然者歟・簀を持、来廿五日小田原へ集、人足奉行ニ可^レ相^三渡^二之、若一人も令^三未進^二、十日之日数至^三于不足^二者、可^レ為^三二曲事^一候、任^三惣国掟^二、罪科普請一日之未進五日可^レ被^三召仕^二」とあり、「国法」ではな

く「惣国掟」としてゐるのである。普請役一日の未進につき五日の追徴という規定は、天正十二年（一五八四）二月に岩付領箕田郷堤普請人足を徴發した岩付城主北条氏房朱印狀に「惣国之法」としてみえる。これら「惣国掟」「惣国之法」もまた「国法」といってよい。私は、「分国之定法」「大途御法度」「惣国之法」という表現に「国法」の性格が示されていると考える。すなわち「国法」とは、「大途」を立法者とする「分国之定法」「惣国之法」なのである。したがって、史料上必ずしも「国法」文言がなくとも、そうした性格をもつもの全般を「国法」と理解してよいのではないかと考える。

ところで、小和田哲男氏親さきの三島社祭礼錢納入拒否問題についての史料引用部を根拠に「伊勢宗端一七カ条」なるものを想定し、永祿から天正にかけて現われる「国法」をこれに遡及させる³⁵。この小和田説に対しては、疑問もなくはない³⁶。いまのところ私にはこの問題についての解答の用意はないが、後北条氏の政治的展開のなかで「大途」の權威のもとに出された個別法や、それが先例として集積されたものをいうのではないかと考えている。

(3) 「国家」と「国法」

以上、後北条氏權力発給文書に現われる「国家」「国法」について検討した。まず最初に「国家」について検討を加え、後北条氏權力は「国家安泰」を担う主体としてたち現われていることを指摘した。また「国家安泰」の成否を事実上担うのが「軍法」であった。後北条氏權力は、「公儀」として「軍法」を「国家安危」の鍵を握るものと位置づける武家政権であった。次に「国法」の事例検討を行なった。「国法」文言に示されているものには、人返令、租税、軍役奉仕、寺社行事の料錢米納入などがある。このうち人返令は、納税義務を負い、軍役奉仕を義務づけられた人民の在所への緊縛であり、「国家安泰」の基礎をなしていたと思われる。藤木久志氏は人返令についての所論で、後北条氏の人返令を例に「国法」の発動を、領主連合・国人一揆の盟主として「権門・不入の旧特権を排除し、領主・

代官の支配に優越する（此一札）（大名印判状）の權威のもとに、分国一円からの人返を保障しようとするもの」とした。この理解は前述の検討から従うべきものとする。しかし、「国法」は史料上必ずしも「国法」文言に制約されるものではない。「国法」とは後北条氏家督「大途」を立法者とし、北条家朱印状により発動する「大途御法度」「分国之法」「惣国之法」なのである。

ところで勝俣鎮夫氏は、「一廉之弓矢之刻」に備えての午（元龜元年・一五七〇）二月二十七日付の人改令を引合いに、「戦国大名後北条氏の〈国法〉は、その制定主体たる後北条氏によって〈国家〉の法と位置づけられている」とした。³⁸この人改令は北条家朱印状として出され、

（二）今度御分国中人改有_レ之而、何時も一廉之弓矢之刻者、相当_二之御用可_レ被_二仰付_一間、罷出可_二走廻_一候、至于其儀_一者、相当_二之望之義被_二仰付_一可_レ被_レ下候、并罷出時者兵粮可_レ被_レ下候、於_二自今以後_一ニ虎御印判を以御触_二付而者、其日限一日も無_二相違_一可_二馳参_一候、抑か様之乱世_二者去とてハ其国_二有_レ之者ハ罷出、不_二走廻_一而不_レ叶意趣_二候処_一、若令_二難決_一付而者、則時_二可_レ被_レ加_二成敗_一、是大途之御非分_二有間敷者也、仍如_レ件₃₉。

とするものである。勝俣氏は、「国家」を戦国大名の創出した支配理念とし、具体的には大名領国としたうえで「国法」は「国家」の法とする。そして「国家」はその構成員を「国にある者」＝国民とし、すべての国民は「国家」に対する義務を負い、「国家」は国民すべての保護義務を負うとともに、国民に対する絶対的支配権をその属性として持つ。「国家」は大名権力に優越し、「国法」は大名権力意志の発動形態ではなく、「国家」意志の発動形態である。さらに、大途＝公儀（後北条氏）は主権者として「国家」権力の行使を委ねられた存在であって、「国家」への義務を果たさない国民への処罰は大途の非分ではないとした。人改令には「国法」文言は明記されていない。だが前述のように「国法」は「国法」文言に拘束されるものではない。人改令は直接「軍法」に関わるものであり、北条家朱印状によること、またその内容からも「国法」のひとつといつてよい。

この勝俣氏の所論は「国家」と「国法」とを総括したものといえる。大名権力を超越するものとしての「国家」と、「国家」権力の行使を委任された存在としての後北条氏が発動するものが「国法」という論理は、藤木説では説明されない。「国家」の意義を踏まえたものである。私は後北条氏を「国家」の統治権者とみることには同意したい。確かに「国法」は、その内容かみても、けっしてその地域「国」に定着した基本秩序としての良き旧き法というのではなく、支配に寄与するために後北条氏権力が定律化したものといえ、したがって後北条氏権力は、「国法」の維持者としてではなく、前述のように立法者としてたち現われているといわねばならない。さらにこの立法者は、「国法」を被支配層に強制する主権者でもあって、「其国ニ有_レ之者ハ罷出、不_レ走廻_ニ而不叶意趣_ニ候」とあるように、後北条氏の支配する「国」にある被支配層は、この「国法」を遵守すべきものとされた。そこに後北条氏権力の政治権力としての自立性を確認することには異論はない。しかし、ここでの「国家」を戦国大名の創出した理念とみなし、具体的には大名領国としたうえで「国法」を「国家」の法とみる点には同意しがたい。「国法」とは「大途御法度」であり「分国_ニ之定法」にすぎないのである。戦国大名の支配領域を意味する史料用語は、あくまで「分国」なのである。次節ではこの「分国」について検討し、合せあらためて「国」「国家」の意義を考えてみたい。

二、後北条氏権力と「分国」

「分国」という語は、各研究者とも大名領国と同義で使用されている。しかし、このとき「分国」という語そのものに對する語義上の言及はなされていない。分国法と戦国家法とがまた同義で使われているが、こうしたあり方は史料文言上の「分国」が戦国大名権力を評価するうえでなんら顧慮されていない証左といってもよい。「分国」の語をどう理解するかは、戦国大名権力の性格を考えるうえで看過しえない問題であると考ええる。「分国」とは、『小学館国語大辞典』によると朝廷や幕府から分配されて知行権を委ねられた（国郡制上の）国をいい、平安末期に皇族・

公卿らに一または数か国を賜わり知行させたのにはじまり、室町から江戸期の守護や大名の領地をもいうとあり、『大乘院寺社雜事記』明応四年（一四九五）二月十七日条の「公方御祈所細川分国（畠山）ハ、近來令ニ無沙汰」などを例示している。この「細川分国」とは守護細川氏の管国にはかならない。

（附）為弘法大師七百年忌、被_レ成_ニ綸旨并奉書_一候、分国之内御門徒中奉加之事、可_レ在_ニ之者也、仍執達如件、
（五三三）
 享祿五年五月三日

東寺宝菩提院御坊（附）

（ハ）息氏政御相伴望存候、向後者分国之儀、彼ニ可_ニ申付_一候間、如_レ此申上候、猶聖護院殿申入候条、被_ニ仰談_一可_レ然
 様御取合所_レ仰候、恐々謹言、
（道増）

（天文二十三年カ）
 六月朔日

左京大夫氏康（花押）

大館左衛門佐殿（晴光）
（附）

史料（附）は、弘法大師七〇〇年忌につき綸旨・奉書を受けた氏綱が、「分国」内にある京都東寺宝菩提院の末寺・門徒中の奉加を約束したものである。このかぎりでは、後北条氏権力は天皇を頂点とする秩序構造（権門・顕密体制）に包摂されるものであったといえる。史料（ハ）は氏康が「分国之儀」を将来息氏政に申し付けるとして、氏政の幕府相伴衆列座を幕府内談衆の大館晴光に要請したものである。後北条氏の支配権力たることの宣言であるとともに、幕府体制への求心性が示されている。また聖護院については申し入れの内容は不明であるが、氏綱の「内縁」に摂関家近衛尚通女子があり、彼女は近衛植家や聖護院門跡道増の姉であり、さらに聖護院門跡は、後北条氏領をはじめ主に東日本に勢力圏を形成した本山派修験の法頭である。ここにも後北条氏の公武寺社の権門体制的性格が窺われる。

こうした後北条氏の権門体制的性格は、前節でみた「国家安泰」を一元的に担うものとしてたち現われている姿に、いっけん相容れないものを感じさせる。この点について示唆的なものが、永祿四年（一五六一）五月の箱根権現別当

金剛王院融山と氏康との書状の往復である。これは天道思想・王土思想のもとに展開され、⁽⁴³⁾ の中で融山は、上杉氏を天子の御幡のもと東八州副将（関東管領）となつたにもかかわらず、王法に従わず、仏神を崇めずに「国家」を乱して万民を苦しめたと断じ、北条家は前代日本の副將軍の名字を継いだからには、『吾妻鏡』に記されるように善根なければただ危き様となるとしたうえで、あまねく天の下みな王土であり「禁中御修理」は「可_レ被_レ仰_レ救_レ儀_{（勅）}」太守「似合之御事」とした。さらに融山は、

(1) 御分国之大社明仏等大破之時者、速御修理可_レ然候、^(貞力) 大永之式目ニ茂、神者依_三人之敬増_二威、人者依_三神之德添_二運与候敷、今時者、無_二神茂_一無_二仏無_一信無_二善、而万法空_一之入_三邪見_二、不儀之儀与俗出共見得候、誠失_二家可_レ亡_一国基無_二勿_一躰_二候、

一、万民御哀憐之事、百姓ニ有_レ礼者、国家自治与候敷、⁽⁴⁴⁾と述べ、「家」と「国」を保つために「御分国」内の寺社修復を求め、百姓に礼あらばおのずと「国家」は治まるとして万民への哀憐を促したのである。氏康は融山に対して「年来国家御祈念頼入」れ、上杉に勝利したといい、「普天之下無_二不_一王土_二上、御修理可_レ走廻_一由、尤任_二御見_一候」として禁中修理料の禁裏領所仁科郷からの進納を約束した。そして以下、

(1) 一、万民哀憐、百姓可_レ尽_レ礼、御意見令_レ得_二其意_一候、去年分國中諸郷へ下_二德政_一、妻子下人券捨、為_二年経_一迄遂_二礼明_一、悉取帰遣候、当年者諸一揆相之德政、就中公方錢本利四千貫文、為_二諸人捨_一之、蔵本押置、現錢番所集、昨今諸一揆相ニ致_二配当_一候、家之事、慈悲心深信仰專順路存詰候間、国中之聞立邪民百姓之上迄、無_二非分_一為_レ可_レ致_二沙汰_一、十年已来置_二目安箱_一、諸人之訴お聞届、探_二求道理_一候事、^(後拾) 一点毛頭心中ニ会_二乎偏頗無_一之候、天道明白敷、八州不_レ殘渡_二当方_一来候、徐_二廿年_一存_二国家_一候間、一代之内、無_二横合_一時身退者、聖人之教与存、去年息氏政讓_二渡位_一、隠遁之進退候得共、大敵蜂起、氏政若輩之間、無_二了簡_一、国家之成意見候、然ニ

氏康無善根間、如此等候、此貴意、乍^レ恐御相違候、縦善根有^レ之共、心中之邪ニ而、諸寺諸社領令^ニ没倒^一様なる国主ニ付而者、如何様之大社之御修理、何度致^レ之候共、神者不^レ可^レ受^ニ非礼^一、縦不^レ向^ニ經論聖教^一、常ニ不信之様ニ候共、心中之実、即可^レ叶^ニ天道^一候歟、於^ニ氏康^一、或不足之出家沙門お憐愍、或伽藍零^廢之所歟ケ敷間、
 先年^(永禄元年)午歲鎌倉在馬之砌、諸寺・諸山周寄^ニ附田畠^一候キ、其外国中之神社・仏閣へ少充之料所お雖^{寄進仕候}ニ歩之地茂押^ニ領之^一事者、一代不覚候、何之驕^ニ歟、可^レ背^ニ天道^一候哉、天運不^レ尽者、一戰勝利無^レ疑候^也。

と述べた。右の融山の言から窺えることは、「国家」とは王土に形成された「国」と「家」、つまり大地と人との総体であり、後北条氏の「分国」はそうした王土の一画にすぎず、「分国」における「国家」を、勅儀を仰ぎ王法に従って安んじるのが「大守」のあるべき姿であるという。「分国」統治権の被委任性である。そして氏康の返答はこの融山の論調に従うものであったのである。前節で言及を留保した「国」「国家」の意味するところ、そして「分国」の意味するところは、この融山の言のなかにあるといつてよい。さきにも触れた承和十二年（八四五）九月十日付民部少符案にある「東寺是桓武天皇草創、鎮護国家砌也」というように、為政者のなすべきことは「国家」を鎮護することであり、これは時代を経て後北条氏権力においても同様であった。『日葡辞書』は「cocca nacca (国家)」を「cuni、ive (国家) 国と家、または、国と一族と」する。すなわち大地またはその一定区域としての「国」（『小学館国語辞典』。「日本国」あるいは郡国制上の「国」は区域としての「国」である。）と、その「国」に住まう人々の「家」との総体が「国家」なのであり、為政者たる者はその「国家」の鎮護・安泰を第一義とするのである。

さて、右のように後北条氏権力はみずからの支配領域を、統治権の委任を受けた「分国」と認識したのであるが、では、後北条氏「分国」外の支配権力はどのように認識されるのか。以下、この点についてみておきたい。

（天正三年・一五七五）六月二十五日付の安独斎上田宗調充北条氏政書状の一文に「甲州無^ニ仕合^一之儀、無^ニ是非^一候、然共彼分国諸境目無^ニ異儀^一由候」とある。「甲州」つまり武田氏との対立は仕方ないが、「彼分国」との諸境目は

無事であるというのである。また天正十年（一五八二）の武田氏滅亡後、旧武田氏領は上杉・徳川・後北条の三者に分割されるが、同年八月九日付の諏訪上社神長官守矢信真充北条氏邦書状は、「勝頼分国中、氏真就御静謐、当家天下静謐、以先例、当方可有御祈念之由、肝要至極、目出珍重候、即大途江可申上候」とあって、旧武田氏領を「勝頼分国」としているのである。また天正六年（一五七八）十二月二十日付駿河国駿東郡泉郷百姓窪田十左衛門充の北条家朱印状は後北条氏「分国」を「当方分国」とよんでいる。要するに「分国」とは、自他の別なく戦国大名の支配領域一般を指す名辞なのである。

ところで、右の窪田十左衛門充北条家朱印状は、十左衛門が伊豆国弥勒寺への欠落者の人返を拒む弥勒寺中野一右衛門を提訴したことに対する裁決で、「人返之事、前々者豆州之者共、駿豆各別之時、駿州へ相移其儘拘来、去已（永禄十二年・一五六九）歳駿州当方分国ニ落着、翌年午歳以譜代之筋目弥勒寺へ許容非分候、無相違可召返」としたものである。この欠落者はもと弥勒寺にあったと思われ、「駿豆各別」、すなわち駿河国が今川氏「分国」、伊豆国が後北条氏「分国」であった頃に弥勒寺から泉郷へ欠落したのだが、後北条氏ではこの時点での欠落を容認せざるをえなかった。欠落者は窪田の下人となったとみなされ、再度弥勒寺へ欠落したものの、弥勒寺側のいう「譜代之筋目」は否定されてしまったのである。このことは、永禄十二年（一五六九）の駿河併合以前の「駿豆各別」期に駿河国において発効した権利関係に後北条氏は口を挟む立場にはないことを示し、後北条氏の人返令は時期を遡及しても後北条氏「分国」内のみ発効するのであって、他の「分国」へは権限外のことであった。後北条氏の人返令が欠落先をいずれも後北条氏「分国」内として行っていることはこのためである。後北条氏権力は、その「分国」の上級権力「公儀」としてたち現われたのであるが、その権力行使は自身の「分国」内に限定されるものであった。後北条氏「分国」の外部にはまた別の支配権力の「分国」があり、協調と緊張関係を保っていたのである。日本の戦国期は、こうした諸「分国」がたち並んでいたのである。

以上、本節では戦国大名の支配領域を示す史料文言「分国」を検討し、合せ「国」「国家」の意義をみた。後北条氏は「分国」の支配権力たるを自認する他方で、むしろ「分国」の統治権者として幕府や公家、京畿の寺社といった中央権威への求心性も示すこと、「国家」とは王土に形成された「国」と「家」、つまり大地と人との総体であり、「分国」とは勅儀によりその「国家」統治権の委任を受けた王土の一画とされることをみた。このことは戦国大名の「分国」が知行権の委任という「分国」ほんらいの意義から逸脱するものではなかったことを示唆し、戦国大名にとり所謂中央権威や国家公権の獲得が要件とされたことを窺わせる。さらに戦国期の日本はそうした諸「分国」がたち並ぶ情況にあったことを指摘した。しかし、「分国」というかぎり、これらを包摂する枠組を想定せざるをえない。この枠組こそが「日本国」である。次節ではこの「日本国」と後北条氏「分国」との関係を検討していきたい。

三、後北条氏権力と「日本国」

本節では、前節の「分国」の検討を受けて諸「分国」を構成する「日本国」に枠を広げ、それを通じて後北条氏「分国」の位置を考えていきたい。

(1) 後北条氏権力と「日本国」

後北条氏権力の発給文書には、「大日本国」「日本国」の語が現われる。前者は寺社への寄進物の銘に、後者は起請文の罰文（神文）に現われる。寄進物銘としては、天文十九年（一五五〇）五月十八日付大工秀吉の浄智寺鐘銘は、「大檀那主君公武棟梁大祖從四位左京大夫平氏康」以下が「大日本国豆^州湯山東明寺推鐘一口御寄進」したとしている。また起請文については、天文十二年（一五四三）三月二十一日付の関東公方足利晴氏の奉行人築田高助に充てた北条氏康起請文⁵⁹がその初見である。内容は前書に（一）氏康は上様（晴氏）に対して変わりのないこと、（二）何事も御頼み

の事、力のおよぶかぎり行なう、(三)御難儀あれば助勢するとし、罰文に「若偽候者、上梵天・帝釈、下堅牢地神、惣日本国中小神祇、別而武州六所大明神、伊豆・箱根両所権現、八幡大菩薩可レ蒙御罰二者也」としている。以後起請文は氏康が築田晴助⁵⁴へ、また氏康・氏政連署で由良成繁・国繁⁵⁵、さらには上杉輝虎⁵⁶に充てたものが確認される。また氏政や氏照⁵⁵が築田時助や築田持助などの足利家臣へ充て、いずれの罰文も「日本国中小神祇」の文言を含みほぼ大差ないものとなっている。充所はいずれも後北条氏の外部の権力体であり、後北条氏はそれらとの協調関係の誓約として起請文を作成したのである。

さらに「扶桑国」の語にも留意したい。北条氏房の臣伊達房実施主の天正十七年(一五八九)五月如意日付慈恩寺鉄灯籠銘⁵⁶には、「扶桑国関以東武州路埼西郡岩付爰岩付慈恩教寺者光世音大士古道場也」とある。「扶桑国」とは中国からみて東の方にある日本国の異称である。こうした寄進物銘や起請文罰文に現われる地名表現には後北条氏「分国」を示す独自の名辞が提示されていない。起請文罰文において罰を与えることされる神祇も、具体的には伊豆・箱根両所権現、鶴岡八幡、三島大明神などの後北条氏「分国」内のものであるが、これらはいずれも「日本国中小神大祇」のうちであり、「別而」と強調されるにすぎない。したがって「分国」の語が権力のおよぶ領域を示す概念になりえたとしても、それがなんらかの個有の呼称を成立させるには至らず、諸「分国」は「日本国」から離脱するものではなかったことが指摘できる。

(2) 後北条氏権力と京都

第一節で述べたように、後北条氏権力が後北条氏「分国」内の権力関係を集約・再編した上級権力に疑いはなく、政治権力としての自立性は認めねばならない。だが後北条氏権力の自立性も、これまでに見たように「分国」統治権の被委任性を否定しえず、「日本国」の枠組から離脱するものではなかった。さらに、後北条氏「分国」あるいは

「關東」「東国」の京都に対する下位、裏返していえば京都の他地域に対する優位性はなんらの否定・克服もされていなかった。それを示す名辭が「下国」とその對義語である「上洛」である。

寅（天正六年・一五七八）卯月三日付長野喜三充忍城主成田氏長朱印狀は、「伊勢參宮候哉、大儀候、明瞭候者、早々下国、可_レ為_二祝着_一」としている。伊勢信仰が確認されるが、伊勢より後北条氏「分国」に向かうことを「下国」とよんでいるのである。

(1) 幸便之間令_レ啓候、抑路次無_二相違_一御上洛之由伝承、令_二安堵_一候、御在国中者、每物無風流之式、失_二面目_一候、雖_レ然無_二等閑_一申承候儀、于今々々難_レ忘、御殘多存計候、就中京都様子如何、御入洛之御催候哉、実說不_レ聞候、便_二具可_二記給_一候、委曲期_二来便_一候、恐々謹言、

九月二日

(半井光成)⁽⁵⁸⁾
驢庵几下

氏 康（花押）

史料(1)は氏康が朝廷の医官半井驢庵に充てた書狀で、（驢庵が）無事に「御上洛」を果したことを伝え聞き安心した。「御在国中」はいつも無風流で面目ありません。等閑なく承ったことはいまも忘れられずにいます。京都の様子はいかがでしょうか。「御入洛」のお誘いとのことですが確かなことは聞いておりません。お手紙をお待ちしております、というものである。この直前氏康は病にかかっており、驢庵は氏康の治療に携わったのであろう。京都へ行くことを「上洛」、京都へ入ることを「入洛」といっているように、氏康からみて京都こそが都なのである。そして無風流を詫げるなど宮廷文化の優位性も指摘できる。また氏邦は遠江へ行くことを「彼国へ罷上⁽⁵⁹⁾」としている。必ずしも京都ではなく、京都の方に行くことが「上洛」なのである。伊勢からの「下国」はこの裏返しといえよう。

では、小田原は都・洛ではないのか。小田原にすることを「在府⁽⁶⁰⁾」といい、小田原に赴くことを「参府⁽⁶¹⁾」といったように、小田原は後北条氏「分国」の「府」なのである。半井驢庵は後北条氏「分国」に「在国」していた。「在

「国」とは洛外に在ることであり、驢庵「在国」先の「府」が小田原なのである。したがって小田原は、京都に対して地方政庁のひとつ、いわば令制下の国府に擬せられるにすぎないのである。

ところで、畿内以西から天下一統をすすめていった豊臣秀吉は、徳川家康を通じて後北条氏に影響をおよぼし、「関東惣無事之儀⁶²」を申し入れた。秀吉は後北条氏の軍事行動を私戦とみなし、これの停止を命じたのである。さらに氏政・氏直父子の上洛を要請、天正十五年（一五八七）五月、家康は以下の起請文を氏政・氏直充に与えた。

(外) 敬白 起請文

一、其方御父子之儀、於_二殿下御前、惡様申なし、佞人之覺悟を構へ、御分国中毛頭不_二相望_一事、

一、今月中、以_二兄弟衆、京都へ御礼可_レ被_二申上_一事、

一、出仕之儀、於_二無_三納得_一者、(氏直_三督姫)家康娘可_二返給_一事、

右条々存_二曲折_一、令_二違背_一者、

梵天・帝釈・四大天王、惣日本国中六十余州大小神祇、別伊豆・箱根両所権現、三島大明神、八幡大菩薩、天満自在天神、部類眷属神罰・冥罰可_二罷蒙_一者也、仍起請文如_レ件、

天正十五年

五月廿一日

家康（花押）

(氏直)
北条左京大夫殿

(氏政)
北条相模守殿

これは秀吉の指示を受けた家康が、氏政・氏直父子の上洛を要請したものである。氏政・氏直を「其方」とよび、秀吉を「殿下」とよぶ。氏直は左京大夫、氏政は相模守であり、秀吉は「殿下」すなわち関白・太政大臣なのである。また「御分国中毛頭不_二相望_一」とは後北条氏「分国」の支配権の否定であり、「出仕」とはここでは秀吉の前に出る

ことを意味する。また、起請文とはみずからの行動・言説に偽りのないことを誓うものだが、これは充所の行動を強制するものであり、異例なものである。後北条氏は天正十六年（一五八八）に氏政の弟で韭山城主の氏規を上洛させたが、氏政・氏直の上洛は行なわれず、天正十七年（一五八九）十一月四日、「北条左京大夫」充豊臣秀吉朱印状が出された。その第一条には、

(一) 北条事、近年蔑^ニ公儀^一、不^レ能^ニ上洛^一、殊^ニ於^ニ関東^一任^ニ雅意^一狼藉条、不^レ及^ニ是非^一、然間去年可^レ被^レ成^ニ御誅

罰^ニ処^一、駿河大納言家康卿依^ニ為^ニ縁者^一、種々懇望候間、以^ニ条数^一被^ニ仰出^一候へハ、御請申付而、被^レ成^ニ御赦免^一、

則^ニ美濃守罷上^一、御礼申上候事、

とあり、第五条では柴田勝家を「国家」を乱した「叛逆」者と断じ、その末尾は、

氏直背^ニ天道之正理^一、对^ニ帝都^一企^ニ奸謀^一、何^レ不^レ蒙^ニ天罰^一哉、古諺言、巧訴不^レ如^ニ拙誠^一、所詮普天下逆^ニ敕命^一輩、早不^レ可^レ不^レ加^ニ誅罰^一、来歳必携^ニ節旄^一、令^ニ進発^一、可^レ刻^ニ氏直首^一事、不^レ可^レ廻踵者也、⁽⁶⁵⁾

としている。後北条氏を「蔑^ニ公儀^一」むものと位置づけ、誅罰するべきところを「大納言家康卿」のとりなしで許したのであるとして、柴田勝家を引合に氏直を暗に「国家」を乱す叛逆者とみなし、「天道」に背き「帝都」に悪巧を企て「勅命」に逆うものと断じ、来年には天子から賜わる節旄を携え、氏直の首を刎るぞと威嚇したのである。

豊臣政権は、右のように天皇を推戴し、「天道」に従い、「日本国」における唯一の「公儀」として後北条氏に臨んだのである。これに対し後北条氏は天正十七年（一五八九）十二月五日に「為^ニ国法^一」⁽⁶⁶⁾として人返令を発動するなど、依然「分国」の「公儀」としてあり、同月十七日、氏政は「天下之至于大途^一者、是非興衰此節迄候^一」と覚悟し、同月二十四日、「大途」氏直は「弥闇^ニ万事^一、一途^ニ可^レ遂^ニ防戦支度^一」⁽⁶⁷⁾と指令したのである。つまり、後北条氏にとり対豊臣戦は、「天下」を賭けた「公儀」と「公儀」との戦いであった。しかし、豊臣政権にとりこの戦いは、「西国征伐」⁽⁶⁸⁾と同じ「征伐」なのであり、「公儀」を蔑み、「天道」に背き、「勅命」に従わないものを処罰する「成敗」⁽⁶⁹⁾

にすぎなかったのである。

ところで、これまでにみたように「天道」に従い、「勅儀」「勅命」を受け、「国家」を安んじるという点で、後北条氏権力も豊臣政権もその「公儀」認識に変わるところがない。しかしその相違点を求めるならば、それは「日本国」における政権構想の違いである。すなわち後北条氏権力は「分国」を支配するものとし、豊臣政権は「分国」を付与するものとしたのである。さきの徳川家康起請文にみる「御分國中毛頭不_レ相望」とは、後北条氏権力の「分国」支配権を否定し、「分国」の支配権を付与するのは豊臣政権であるという意味である。「御」字は「分国」を付与する側への尊意といえよう。後北条氏権力は「日本国」の一面の「分国」の支配権力たらしめた。これに対して豊臣政権は、「日本国」そのものの支配権力たらしめたのであったのである。「左京大夫」と「関白・太政大臣」という官途の格差にもそれがあらわれている。

以上本節では、後北条氏権力と「日本国」との関係について検討した。まず後北条氏「分国」は「日本国」のうちにあることを指摘し、次に京都の優位性を指摘した。さらに所謂小田原征伐から豊臣政権との対比で、「分国の支配権力たらしめとする後北条氏権力と、「日本国」の支配権力たらしめとする豊臣政権との「日本国」における政権構想の違いをみた。

おわりに

本稿は、所謂戦国大名権力の性格を後北条氏権力を素材に、「国」を通じて検討した。一、「国家」と「国法」、二、「分国」、三、「日本国」を、それぞれ後北条氏権力との関係で検討した。そして、「国家」とは王土に形成された「国」と「家」、すなわち大地と人との総体であること、「国法」とは「大途」に公儀がその支配領域「分国」に発動する「大途御法度」「分国之定法」「惣国之法」であることを指摘し、後北条氏権力の政治権力としての自立性

を確認した。次に、しかしそうした後北条氏権力は、天道・王法に従い、「勅儀」を仰ぎ、「国家安泰」を担うという「分国」統治権の被委任性をもつことをみた。さらに、「分国」が「日本国」から離脱したものではなく、京都に対して下位にあることを指摘し、豊臣政権との対比で、「分国」の支配権力たらんとする後北条氏権力と、「分国」を付与する「日本国」の支配権力たらんとする豊臣政権との「日本国」における政権構想の違いをみた。ここに戦国大名権力の性格の一端を窺うことができる。

註

- (1) 「かな目録追加」(『中世法制史料集二』)。
- (2) 勝俣鎮夫『戦国法成立史論』東京大学出版会、一九七九年。同「一五——一六世紀の日本」(『岩波講座日本通史10』岩波書店、一九九四年)。
- (3) 水林彪『封建制の再編と日本の社会の確立』山川出版社、一九八七年。佐藤博信『古河公方足利氏の研究』校倉書房、一九八九年。
- (4) 久保健一郎「公儀としての戦国大名」(『歴史評論』五二三、一九九三年)。
- (5) 註(4)。
- (6) 『平安遺文』七六号。
- (7) 註(4)。
- (8) 『戦国遺文 後北条氏編』(以下、『戦遺』と略称)五六号。
- (9) 『戦遺』七〇二号。
- (10) 『戦遺』一四九七号。
- (11) 『戦遺』二四三〇号。
- (12) 『戦遺』三〇一八号。
- (13) 『戦遺』三〇一九号。
- (14) 『戦遺』三〇二一号。
- (15) 『戦遺』九七四号。人返令については、主に農民闘争の視角からの研究史がある。研究史の概要は藤木久志「戦国法の形成過程の一考察」(藤木『戦国社会史論』、東京大学出版会、一九七四年)を参照されたい。藤木論文以降の研究としては峰岸純夫「身分と階級闘争」(峰岸『中世の東国』東京大学出版会、一九八九年)がある。
- (16) 『戦遺』一一八四号。
- (17) 『戦遺』一四七七号。
- (18) 『戦遺』三五五一号。
- (19) 『戦遺』一七二六号。
- (20) 『戦遺』一七二〇号。
- (21) 『戦遺』三二〇七号。
- (22) 『戦遺』三二一〇号。

(23) 註(15)藤木論文。

(24) 『戦遣』三〇三八号。

(25) 『戦遣』一八六一号。

(26) 『戦遣』二〇九二号。

(27) 『戦遣』三二四五号。

(28) 『戦遣』三二四三号。

(29) 『戦遣』一〇四八号。

(30) 『戦遣』一八七九号。なお本文書は『静岡県史料』が年次を天文九年(一五四〇)とし、花押を北条氏綱のものとする。以後これに従って研究が積み重ねられていった。しかし、「毛利丹後」北条高広の名があることから天文九年説は成立しない。本稿は年次・花押とも『戦遣』に従った。

(31) 註(20)。一七二二号は「分国定法」とする。

(32) 註(28)。

(33) 『戦遣』一三八一号。

(34) 『戦遣』二六二二号。

(35) 小和田哲男「戦国国家法研究への提言―伊勢宗端十七ヶ条」の確定をめぐって―(『歴史手帳』四一五、一九七六年)。

(36) 註(15)峰岸論文。

(37) 註(23)。

(38) 註(1)。

(39) 『戦遣』一三八四号。なお註(1)著書は一三八五号を使用されているが、欠損箇所もあり、同じ内容をもつ(「弓矢」と「弓箭」の違いはあるが)一三八四号を採用した。

(40) 『戦遣』一〇〇号。

(41) 『戦遣』四六五号。

(42) 「為和卿集」(『私家集大成7中世V』)。「尊卑分脉」。

(43) 小笠原長和「北条氏康と相州箱根権現別当融山僧正」(『古文書研究』五、一九七一年)。

(44) 『戦遣』四四三七号。

(45) 註(9)。

(46) 『戦遣』一七八九号。

(47) 『戦遣』二三八九号。

(48) 『戦遣』二〇三九号。本文書の解釈には註(15)藤木論文と峰岸論文との間で相違があるが、これは「許容」の解釈の違いに起因すると思われる。この頃窪田十郎左衛門(十左衛門とは同一人物カ)の下人で弥勒寺へ欠落した者には、永禄十年(一五六七)の梅母子と元亀元年(一五七〇)の乙の三人があり(『戦遣』一四七七号)、藤木説では梅母子と乙とを区別せずに、弥勒寺への欠落を元亀元年に後北条氏が承認つまり「許容」したのが「非分」であって、これが本文書によって覆ったとし、峰岸説では元亀元年の欠落者乙の拘え込み「許容」が「非分」であったとする。「許容」には「何らかの意図のもとに、人を自分の許に受入れること。」(『時代別国語大辞典室町時代編二』三省堂、一九八九年)という意があり、梅母子の進退についての疑問は残るものの、解釈は峰岸説に従った。

- (49) 『戦遣』三七四号。
- (50) 『戦遣』二二八号。
- (51) 『戦遣』四〇四号。五七八号。
- (52) 『戦遣』九七九号。
- (53) 『戦遣』一三八二号。
- (54) 『戦遣』一〇一六号。一〇一七号。
- (55) 『戦遣』一〇一五号。一〇二〇号。
- (56) 『戦遣』三四五七号。
- (57) 『戦遣』一九七八号。
- (58) 『戦遣』一〇九三号。
- (59) 『戦遣』四〇二九号。
- (60) 『戦遣』一二七〇号。

- (61) 『戦遣』一二四〇号。
- (62) 『戦遣』四五三二号。なお「惣無事令」については藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』（東京大学出版会、一九八五年）を参照。
- (63) 『戦遣』四五三四号。
- (64) 『戦遣』三三三四号。
- (65) 『戦遣』四五三七号。
- (66) 註(18)。
- (67) 『戦遣』三五七七号。
- (68) 『戦遣』三五八五号。
- (69) 註(65)。
- (70) 『戦遣』四五三八号。